論 文 の 和 文 要 旨

論文題目　João Rodriguez『ARTE GRANDE』の成立と分析

氏　名　馬場良二

『*ARTE GRANDE*』の正式名称は、『*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*』で、16 世紀に来日し 17 世紀初頭まで日本で活躍したイエズス会士、João Rodriguez のあらわした文法書である。ここでは、その成立の背景をさぐり、記述を分析した。本文は 9 章、全体で 204 ページである。

第 1 章　文典成立の歴史的および言語的背景

Marco Polo の『東方見聞録』と Cristóbal Colón の航海日誌を分析、大航海時代の東方へのまなざしがどのようなものであったか、宗教改革に対抗するカトリック教会の旗手となったイエズス会の使命と活動、ラテン語を中心とした当時の西欧世界の言語観、*ARTE GRANDE* の記述に見る João Rodriguez 個人の語学力やその伝記からわかる情熱、以上を考察し、*ARTE GRANDE* の成立の歴史的、および、言語的な背景をあきらかにした。

第 2 章　ラテン語学の与えた影響

西欧世界におけるギリシア語文典からラテン語文典の歴史を概観、そこに Manoel Alvarez のあらわした *DE INSTITVTIONE GRAMMATICA* を位置づけた。

家入敏光（1974）を参考に、*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA* の特徴を原典にもどって調査、分析、そして、*ARTE GRANDE* への影響を「全体の構成」、「名詞の格」、「名詞の複数」、「Verbo substantivo」、「Modo optativo」、「日本語の例文」にわけて、具体的に詳述した。

第３章　ADVERBIO「副詞」について

西欧世界の文典の端緒である Dionysius Thrax のあらわしたギリシア語文典 *Téchnē grammatikē* から *DE INSTITVTIONE GRAMMATICA*、*ARTE GRANDE* への歴史的な変遷と影響を、ADVERBIO の記述にしぼって見、下記の図のような形であきらかにした。

そして、ADVERBIO に関する記述すべてを一覧表にして分析、以下のことをあきらかにした。

○Rodriguez は、原則的に、ポルトガル語の ADVERBIO に意味的に対応する語を日本語の副詞とみとめた。

○CONSTRUIÇÃO の各論にいたってその言語観を大きく転換、ポルトガル語での ADVERBIO ではなく、日本語において連用修飾成分となる語句、さらに、連用修飾成分を形成する接辞や語にまで、副詞の枠をひろげた。

○CONSTRUIÇÃO の各論に形式名詞、副助詞、係助詞、複合格助詞、助動詞、接辞「まい、ごと」などがあげられているのは、Rodriguez の到達した新たな枠組みによるからである。

○副詞の分類を 25 から 30 にふやし、また、オノマトペの重要性に着目したのは Rodriguez の独自性である。

Rodriguez は、学習者のわかりやすいように西欧語学の伝統にのっとり、そして、工夫をしながら、日本語をラテン語の体系にあてはめたのである。

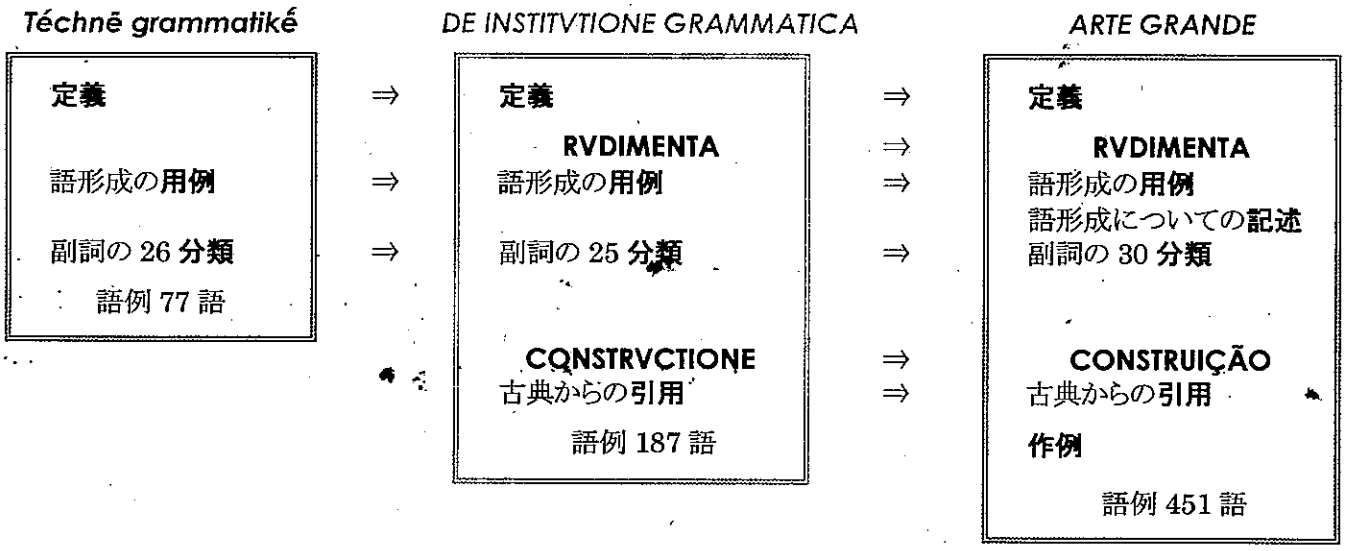

図　Dionysius から Alvarez、そして、Rodriguez へ

第４章　elegância、elegante、elegantemente

Rodriguez の文典には「エレガント」が頻出し、*ARTE GRANDE* には 104、*ARTE BREVE* には 32 あらわれる。これらすべてを抽出、一覧表にし、文脈とともに分析、その由来が古典ラテン語の理想の一つである「ēlegantia」にあること、そして、以下の 17 項目にあらわれていることをあきらかにした。

①一つのことを言うのに多くの語があり、しかもその中で使い分けがある。

②複合動詞や名詞同士の複合語が自由に作られる。

③物事や動作の様子、状況を適確に表わす副詞が数多くある。

④ほぼすべてのことがらに尊敬と礼儀の表現が見られる。
⑤「お / おん / ご＋動詞＋なさる」、「動詞＋ことがある」などの複合述語。
⑥現在の日本語教育において、「中級文型」と呼ばれている文型かそれに近いもの。
⑦使用自体がエレガントだと考えられている語や句や形態素。
⑧ふたつつながった格助詞や「過去の「し」＋より」などの助詞の類。
⑨法令等で使われた「べし」などの文末要素。
⑩倒置などの語順。
⑪動詞の活用形と法との対応関係。
⑫古典、古語。
⑬下位言語、文体。
⑭都、公家のことば。
⑮言語教育。
⑯言い誤りと直訳。
⑰ その他。

第５章　sonsonete

橋本進吉「國語に於ける鼻母音」にある *ARTE GRANDE* からの引用と「sonsonete」の意味の解釈、および、土井（1955）の事項索引に見られる「sonsonete」への注釈、これらにある誤りを指摘し、諸辞書を調査、両文典にあらわれる 10 個の「sonsonete」すべてを一覧、原典にもどってその意味をあきらかにした。

「sonsonete」の辞書的意味は「何か皮肉なことや腹黒いたくらみを口に出して言うときの発音のイントネーション」であり、「鼻にかかった発音」だというのはあやまりである。そして、文脈の中の運用として、「sonsonete」は以下の四つの意味をになっている。

i. もって回ったような、もったいぶった調子。
ii. 母音連続、長母音においてあらわれる地方のなまり。
iii. 鼻音性の強さ、子音の声の有無、長音、撥音などに見られるポルトガル語なまり。
iv. 有声子音の前の母音の鼻音性。

第６章　língua、linguagem、palavra

ARTE GRANDE、*ARTE BREVE* において「エレガント」のある記述にあらわれる「língua」45 個、「linguagem」11 個、「palavra」20 個の 3 語の一覧を作成、それぞれの文脈の中での使われ方と意味とを調査、分析し、以下のことが分かった。

「língua」は、日本語、ポルトガル語、ヨーロッパの言語、言語一般の四つの意味で使われており、日本語を意味する場合は単数で、指示形容詞の「esta」、定冠詞の「a」をともなうか、はっきり「日本の」と記されている。ポルトガル語を意味する場合は、単数形に「nossa（我々の）」という所有代名詞の女性形がつき、ヨーロッパの言語を意味する場合は、複数で「nossas línguas」となる。後者の場合には、「ヨーロッパの」と明記されることもある。言語一般を意味する場合は、「outra（他の）」や女性形の不定冠詞の「uma」をともなう。

「linguagem」は、具体的実際的な用法や言い方、表現をしめす場合に用いられている。

そして、「palavra」は、現代の言語学で言う「語」とだいたい重なる意味でつかわれているが、文脈から判断される意味内容は単純ではない。

以上から、Rodriguezの用語使用の正確さがあきらかになった。

第7章　Bodleian本とCrawford本

*ARTE GRANDE*は、Bodleian本とCrawford本の2冊しか現存しない。これらを見比べ、内容に違いのないことを確認した。

その上で、Crawford本の書きいれについて、土井「クロフォード家本書入抄」にある30か所にくわえ、新たに発見した9か所、それに、「＋」記号10か所を具体的なイメージがつかめるように一覧にし、詳述した。

また、両本の余白にある印刷を比較し、版組に間に合わなかった情報や印刷後に見つかったもれなどは、それだけを版に組んであとから余白に押印したことをあきらかにした。

第8章　*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA*と*ARTE GRANDE*とにおける日本語引用例の対照

土井忠生「長崎版『日本大文典』と天草版『ラテン文典』」であげられている引用例を両文典の原典にもどり一覧表とし、一文字ずつ対照、分析した。また、*ARTE GRANDE*における字体の乱れと乱丁の様子を、影印を示して、あきらかにした。

以上によって、Rodriguezがそろわぬまま原稿を印刷にまわし、イエズス会が原稿のそろわぬ文法書に印刷の許可をだしていたことがわかった。

第9章　Bodleian本と訳本とのローマ字つづりの異同

日本語文のローマ字表記について、Bodleian本と土井氏翻訳の『日本大文典』とを比較対照、その異同を一覧にし、分類した。

どの文化であれ、古来から伝わる古典を大切にする。そして、古典を読み解くための研究をする。西欧世界ではそれが一冊の文典という形をとったが、日本では歌道伝授であったり奥義であったりで、文法書という形はとらなかった。だから、Rodriguezの著した文典は、当時の日本語を知る上で非常に貴重な資料となっている。日本語史研究者はこぞってこの文典を参照する。

*ARTE GRANDE*も*ARTE BREVE*も、先行研究の質と量との両面における素晴らしさには目を見張るものがある。しかし、島（1969）の影印には安易な改竄が数多くみられる。印字が悪い箇所、あるいは、汚れて見えにくくなくなっているところをきれいに修正しているのだ。土井（1955）の訳にみられるローマ字表記の引用にも随所に写し間違いがある。しかも、時々その写し間違った表記を欄外で訂正している。

一級の資料であるからRodriguezの記述をよりどころとした研究は多い。ところが、都合が悪くなると「外国人の限界であろう。この記述は間違っている。」と言いはなつ研究者がいる。私は、日本語教師だ。日本語母語話者でないなら日本語はわからない、間違える、とは考えない。日本語学習者が書き、話したことは、まずそのままを読み、聞きとって、それから、何が言いたいのかを考える。

Rodriguezを研究の手立てにするならポルトガル語を読め、とは言わない。ただ、訳であれ、原典であれ、*ARTE GRANDE*を読むために必要な最低限の知識と常識をここに書いた。

この論文が、日本語史研究の一助となることを願ってやまない。